

ナシ樹体ジョイント仕立ての検証による東京型改植モデルの確立

【背景と目的】

樹体ジョイント仕立て法（特許第 4895249 号、以下、ジョイント）は、1本の長い苗を接ぎ木して直線状の集合樹とする仕立て法で、ナシの改植技術として全国的に導入が増えている。早期成園化、多収、労働時間削減・労働強度の軽減などの効果が期待できる技術として確立されているが、ナシ「幸水」での研究成果である。そこで、東京特産品種「稲城」のジョイントを行い、東京都における早期成園化技術の効果や問題点を明確にする。また、根圏制御栽培と共通樹形にした場合の効果も明確にする。

【成果の概要】

平均枝長は全品種でV字区が長く、平棚区の1.2～1.5倍だった。ジョイント4年目まで、全区で結果枝として十分な枝数と枝長が確保できた。満開日、収穫開始日は、樹形による差はほぼなかった。全区で3年目より本格的に収穫が可能になった。10aあたりの収量は、「稲城」4年目の平棚区で1.7t、V字区で1.8tだった。同じ年生の根圏区と比べて、同程度かそれ以上の収量が確保できた。果実重は、樹形による差はみられなかったが、年次差がみられた。糖度は、樹形や年次差はみられなかった。食味は良好で、販売可能な果実が収穫できた。作業時間は、着果管理の占める割合が大きく、総作業時間では全品種でV字区が短くなった。種苗費は、栽植本数が増えるため、慣行区より高くなる。V字区は新規に棚の整備費も必要であり、10aあたり20万円程度かかる。全品種のジョイント平棚区およびV字区で、定植4年目までの総販売額が、導入コストを上回った。